

『副社長の甘やかし家族計画』

著：若月京子

ill：明神 翼

よほど詩央の反応が面白かったのか、それからもときおり宗一は、大人の男の色気を発揮して詩央をからかうようになった。

一夏が眠ったあと、二人きりのときにドキリとするような目で見えるのだ。アワアワする詩央の様子を楽しんでいるらしい。

詩央はすぐにそれに気づいてムツとするのだが、それすらも面白がられていた。

「もう！ からかわないでって言うのに！」

心臓に悪いから、本当にやめてほしいと思う。けれどそれとは別に、親密なそのからかいを嬉しいとも思っている自分がある。

「可愛い反応をするのが悪い。もう何度もしているのに、慣れないものだな」

「そっち関係の免疫ゼロなんです。宗一さんみたいな百戦錬磨じゃありませんから」

「私も別に、それほど経験豊富というわけではないぞ。軽い恋愛を楽しめたのは、二十四、五歳までだ。そのあたりから相手は結婚を考えるし、私は仕事が猛烈に忙しくなったからな」

「ボクからしたら、充分百戦錬磨です。どうせ、恋人が途切れないタイプでしょう？」

「別れると、告白合戦だったからな。付き合っている最中もだが」

「うー...羨ましすぎる.....。モテる男の余裕って、なんかムカつくなあ」

共学でも、女の子たちの注目はイケメンに集まる。合コンの誘いはひっきりなしだし、通学途中でも告白はしょっちゅうあったようだ。

彼女を作ろうと四苦八苦していたクラスメイトたちが、「イケメン滅びろ」と呪詛の言葉を唱えていた気持ちが少し理解できた。

「キミは、共学だったんだらう？ 綺麗な顔をしてるんだから、モテたと思うんだが」

「ボクの顔はあんまり女の子受けしないんですよ。それでも声をかけてくれる子は何人かいましたけど、とにかく忙しかったからなあ。それに遊びに行くお金もなかったし」

「ああ...それで思い出した。遺産関係は、調べさせている途中だ。委任状を書いてもらったが、慎重にしないと」

「お願いします。どうせ取り返せるとは思っていなかったもので、大丈夫です」

宗一の手配で弁護士を雇ってもらい、いろいろと調べてくれているらしい。金銭の絡む機関はガードが固いから、詩央は何枚も委任状にサインをした。

一応は書類を読んで問題なさそうだったのだが、根本は宗一を信頼してのサインだった。

「ボクは、恋愛はまだお預けだなあ。状況と心の準備が整っていない気がします。恋愛って、余裕がないと無理」

「それはどうかな？ 何もかも取っ払って、竜巻のように巻き込まれるのが恋愛かもしれないぞ。恋は盲目と言うじゃないか。まあ、私もそんな経験はないが」

「ないんですか？」

「ないな。相手が私の顔や財力に惹かれたように、私も相手を見た目で判断していた。社会人になってからは、勝手に結婚を進められないよう、慎重だったし。……今考えると、恋愛というより、恋愛ごっこだな」

「でも、ちゃんと付き合ってた、恋人だったんですよね？　なのに、恋愛ごっこ？」

宗一と元妻のことについて話していると、なぜか胸の奥がモヤモヤする。自分でもよく分からないそれは、嬉しい感じのものではなかった。

「思い返してみると、恋と言うには熱量が足りなかった気がする。冷静に判断というのは、恋とは違うかい？」

「ですねえ。普通は、可愛い、好きだ、付き合いたい...ですよ？」

「私の場合は、付き合ってください、好み、OK...だ。好き、の部分がないな」

「ないですねえ。モテすぎて、好きって思う前に付き合うことになっちゃうのかな？　羨ましいような、それってどうなんだって思うような.....」

情緒を育てるという意味では、あまりよくないような気がする。

もっとも詩央のほうも、両親が事故で死んだ十四歳のときに恋愛面での成長が止まっている状態だから、人のことは言えなかった。

それにしても宗一は、これまでにいったい何人の女性と付き合ってきたのだろうかと思う。宗一の口調からすると少なくないはずだし、もしかしたら二桁いつているのかもしれない。

そう考えると詩央はなんだかイラッとし、そんな自分を不思議に思いながらも言う。

「でも、宗一さん、独身なわけだから、これから恋愛すればいいじゃないですか。シングルファザーでも、恋愛しちゃいけないってことはないし。一夏くんっていう息子がいるからこそ、家柄とかに拘らず、自由に恋愛できるんじゃないですか？」

「それは、もう少し生活が落ち着いて、心に余裕ができてからだな」

「さっきボクに、そんなの全部取っ払って巻き込まれるのが恋愛...って言ったのに.....」

「むっ、そう言われればそうか」

そんなふうな打ち明け話、恋愛話は、人と人との距離を縮める。詩央は宗一の内面を少しずつ知るようになり、気づけば互いの気配に慣れ、同じ空間にいても緊張することはなくなっていた。

そして一夏も宗一や詩央に遠慮なく甘えるようになってきたので、安心した律子の来訪もその数を減らした。

律子が訪ねてくるときは家政夫を監視しに来るのではなく、普通に孫と会うためになった。

ときには一夏の祖父も一緒に、初めて見たときには宗一が年齢を重ねたそのままの姿に思わず笑いそうになって困ってしまった。

自分の子ではないかもしれないという疑いを持つ必要がないほど、よく似ている父子だ。

あいにくと宗一が帰ってくる前に帰宅してしまったが、似た顔が三代揃っているのを見てみたくなった。

帰ってきた宗一にそう言うと、彼も一族が揃うと壮観だと笑う。

「ところで、まだ作っているのか？」

「いえ、もう終わりました」

詩央は空いている時間を使って一夏の入園のための袋作りをしていたのだが、ようやくすべて作り終えてミシンを片付けていた。

風呂に入ってサッパリした宗一は、ガウン姿でウイスキーを飲んでいる。

瓶が目に入った詩央は、ラベルを読んで近寄っていった。

たまたま見ていたテレビで紹介していた国産の人気ウイスキーだ。権威のある賞を取ったとかで手に入れにくいと言っていたのが、目の前にある。

「ええっと...ボクもそれ、一口飲ませてもらっていいですか？」

「好きなのか？」

「テレビで見たやつだから、どんな味かなと思って」

「一口だけだぞ」

宗一が差し出してくれたグラスを受け取って、詩央は香りを嗅いだあと、一口だけ飲んでみる。

「うー...からい.....。これを、美味しいって思うんですか？」

「酒は、飲み慣れていないと、味なんて分からないだろう。これは、ストレートだしな。最初は水割りで薄くして、酒の味に慣れていかないと」

「うーん...努力してまで、好きにならなくてもいいかなあ...まだボクには早いつていうことですね」

「そうだな。詩央の二十歳の誕生日には、甘くて飲みやすいアルコールを用意しよう。シャンパンをシロップで割ってもいいかもしれないな」

「それなら、ボクにも美味しく飲めそうです」

見つめ合い、微笑み合いながら二年近く先の約束をする。それはなんとも不思議な感覚で、胸が締めつけられるような嬉しさがあった。

「二十歳になれば、立派な大人だな」

「今でも、社会的には大人の定義に入ると思うんですけど。一応、学生じゃなくて働いているわけだし、もう結婚もできる年です」

「ああ...そう言われてみると、そうか。結婚できる年か.....」

「そうですよー。すでに立派な大人です」

笑って胸を張る詩央を、宗一がジッと見つめる。今までより熱のこもった目。詩央はその目に捕らわれ、視線を外せなくなる。

「——」

なんとも言えない不思議な時間。

見つめ合い、どちらともなく顔が近づいていき——。

触れる直前に、声をかけられる。

「.....お父さん？ お帰りなさい.....」

目をこすって寝ぼけた様子の一夏に、二人はハッと我に返って体を離れた。

「あ、ああ、ただいま。目が覚めちゃったのか？」

「喉、渴いたの.....」

「じゃあ、お水を飲もうか」

「うん」

詩央はコップに水を注ぎながら、今のはなんだったのだろうかとドキドキする。

キスしそうだった？ と考えて、カーッと体が熱くなった。

そうと意識してしまえば宗一がまともに見られず、多少挙動不審になってしまう。一夏をもう一度トイレに行かせて寝かしつけると、宗一のいるリビングには戻れず、自分の部屋に逃げ込んだ。

そしてベッドに入り、目を回しそうになりながらさっきの出来事を反芻する。

熱い、宗一の眼差し……。

見つめられ、動けなくなってしまった。

いつものからかいではすまない雰囲気と、キス寸前まで近づいた顔。一夏が起きてこなければ、そのままキスしていたはずだった。

「宗一さんも、驚いた顔してたし……」

一夏に声をかけられて我に返った瞬間、キスしそうだった自分に気づいて驚いたのは詩央だけではない。宗一もまた、充分すぎるほど驚いていた。

「やっぱり、いつものからかいじゃない……」

じゃあなんだと自分に問いかけると、迷宮に入り込んでしまう。

「キスしそうだった……キスしたいって、思った。キスしたいって思うってことは……。いやいや、でも、そんなわけないしっ」

普通なら、可愛い、好き、キスしたい——だ。

しかし相手は男で、可愛いとは程遠い年上の色男。詩央のキスしたい定義からは大きく外れている。

「でも……」

宗一の瞳に捕らわれたあの時間、快感めいた感覚が背筋を駆け上がった。

詩央が初めて感じた、強烈な磁力にも似た誘惑で、触れたい、キスしたいと頭ではなく体が勝手に動いていた。

「い、いや、いや、でも、そんなはずないって」

頭から消えない衝動と、間近で見た宗一の熱っぽい目。

その夜、詩央はなかなか眠りに入ることはできなかった。

★ ★ ★

あの熱のこもった接触から、詩央と宗一の間に流れる空気は確実に変わった。

互いに互いの存在を思いっきり意識し、ギクシャクしてしまう。そのくせ妙に甘ったるいものを抱え、オズオズとした接触が増えた。

目と目が合い、見つめられる。

すれ違いざまに、髪を撫でられる。

どれもほんの数秒の、ささやかな接触ではあるが、詩央の心臓は跳ね上がり、鼓動が速くなってしまった。

一夏が眠ったあとの時間...三人掛けのソファに座ってテレビを見る。縫い物がなくなった詩央は手持ち無沙汰だが、自室に戻る気にはなれなかった。

宗一と少しでも一緒にいたいという気持ちがあって、それが詩央を困惑させる。

「ええっと...明日は、一夏くんの入園式ですね。休めそうですか？」

平日だから無理だと思っていたが、宗一は休みを取ると告げていた。

「ああ、無事に休めることになった。入園式は午前中だけだろう？ 帰ってきたら、遊園地に行かないか？ せっかく休みが取れたからな」

「いいですね。行く場所はもう決まっているんですか？」

「いや、まだだ。どこがいいかな」

「近場で、子供が楽しめそうなところ...ちょっと探してみます」

やることができたと言った詩央はスマホを取り、いそいそと検索をかける。

常に手元に置くようにしているスマホは、持ってみると本当に便利だ。献立をどうしようか迷うときなどは、検索して参考にさせてもらっている。

そうたびたび使うわけではないが、確かにパソコンより気軽なツールだとは思う。

「——ここなんて、どうでしょう。近いし、小さい子でも楽しめそうです」

「どれ」

画面を見るため必然的に宗一が近づき、それに気づくと詩央の心はざわめいた。

スマホを持つ詩央の手に宗一の手が重なり、見やすいよう角度を変えられる。

思わずビクリとして視線を上げると宗一と目が合って、その黒い瞳に捕らわれてしまった。

「——」

髪を撫でつけた仕事モードの宗一も凛々しくていいが、詩央は風呂上がりにガウン姿で寛いでいるこんな宗一も好きだ。そして好ましい...ではなく、はっきり好きだと思っている自分に戸惑う。

ドライヤーを面倒くさがって、艶やかに濡れた髪を無造作に掻き上げる姿が格好いい。

詩央より少し体温の高い手で触れられていると、背筋をゾクリとした感覚が上がってくる。

宗一のもう一つの手が詩央の髪を撫で、頬に触れてくる。じんわりと熱が伝わってきて、それが詩央の体の奥の体温を上げた気がした。

頬を撫でる指先が優しい。詩央はうっとりとその感触に浸り、ドキドキと胸を高鳴らせ、頬を紅潮させる。

さすがに、前のときのようにキスしそうになることはない。あれは本当に、自分でも意識していない、制御できないような衝動だったのだ。

そして、今は——今は、この気持ちなんなのか探っているような状態である。近づいて見つめ合い、ライクなのかラブなのか判断しようとする。

宗一のほうもそれは同じようで、互いに自らの感情を探っている。それと同時に、こんなふうなおズオズとした接触を楽しんでもいた。

これはこれで、なんとも言えない甘酸っぱく素敵な時間だったのである。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>